

令和5年度 第1回 堺市スポーツ推進審議会 会議要旨

1. 日 時 令和5年10月26日（木）午前10時から
2. 場 所 堺市役所 本館12階 第1・第2委員会室
3. 出席委員 西山哲郎会長、三宅孝昭副会長、藤井載子委員、大西耕治委員、信貴良太委員、泉博委員、中曾一彦委員、池田義枝委員、名里陽委員、森内敬司委員、加藤伸一委員、福尾ひさみ委員、秋元美智代委員
4. 欠席委員 田中義昭委員、澤本美奈子委員、池島明子委員、清水万里委員
5. 行政側出席者 文化観光局長、スポーツ部長、スポーツ推進課長、スポーツ施設課長、スポーツ推進課長補佐、スポーツ施設課長補佐、スポーツ推進課企画係長、スポーツ推進課推進係長、スポーツ施設課管理係職員、スポーツ施設課施設係長
6. 傍聴者 0人
7. 案件
 - (1) スポーツ推進プランの概要と進捗報告について
 - (2) 堺市スポーツ推進プランにもとづく令和5年度の実施状況について
 - (3) 今後の方向性について
8. 会長・副会長選任
令和5年・6年度の堺市スポーツ推進審議会会長に西山哲郎委員、副会長に三宅孝昭委員が選出され、就任が決定した。
9. 会議内容
事務局より案件（1）から（3）について「案件説明パワーポイント資料」・「資料1」・「資料2」を用いて説明

10. 質疑応答

【信貴議員】

資料 2 ページ「市内体育館等スポーツ施設利用者数」について、コロナ禍の影響がなかったと仮定した場合の目標に対する達成率はどの程度か。

【事務局】

休日の稼働率については、概ね 90%以上利用いただいている。

コロナ禍で休館や時短営業、トレーニング室等の人数制限を実施したことなどにより、令和 3 年度、令和 4 年度は目標に届かなかった。コロナ禍の影響がなかったと仮定した場合、影響を受ける前の令和元年度までは大会の開催数等も増えていたため、目標達成に向けて順調に推移していたと分析している。

【信貴委員】

資料 4 ページ施策 1 について、進捗評価が C 評価の理由をもう一度説明いただきたい。取組が悪かったということではなく、コロナ禍が理由ということか。この評価に基づき、今後の取組を考えていくこととなるため、進捗を評価する際は、コロナ禍の影響を加味して進捗を示すことが正しいことなのか疑問に思う。今後はコロナ禍の影響を踏まえた進捗についても検討いただきたい。

【事務局】

進捗 C の理由については、コロナ禍の影響で、休館や時短営業、大会の中止や人数制限の実施等により、実績値が目標の数値に至らなかったため C 評価としている。コロナ禍の影響がなければ B 評価とすることも考えられるが、あくまでも目標値に対する実績値で評価することが基本的な市の考え方である。

【加藤委員】

施設の稼働率も資料としてあれば、コロナ禍の影響を加味できるのではないか。

【事務局】

施設の稼働率について、データとしては把握しているので、示し方については、今後検討していく。

【森内委員】

資料 2 ページのスポーツ・運動習慣化割合について、市民意識調査の対象を教えてください。

【事務局】

堺市在住の18歳以上の市民5,000人を対象としている。

【大西委員】

資料4ページの施策2堺ブレイザーズプレシーズンマッチ1,000名の無料招待イベントに関して、どの程度の反響があったのか、申込状況等を教えていただきたい。

【事務局】

令和4年度の堺ブレイザーズプレシーズンマッチ1,000名無料招待について、先着で募集したところ、募集当日に埋まるほどのご好評をいただき、席を追加で割り当て、約1,200名にお申込みいただいた。

【大西委員】

プロスポーツに触れることで、スポーツへの関心向上、スポーツに挑戦する意欲の向上にもつながる。幅広く周知いただき、今後もプロスポーツに触れる機会の創出を行っていただきたい。

【会長】

コロナ禍の影響について話があったが、障害者スポーツの観点から、福尾委員は何かご意見はあるか。

【福尾委員】

コロナ禍において身体障害者の水泳の近畿大会で運営スタッフをしていた。全国大会につながる大会のため、運営側としても中止するわけにはいかず、大会は継続して開催していた。様々な配慮が必要な中、人数制限や消毒など感染対策を徹底して運営し、選手には日ごろの練習の成果を発揮できる場を提供できたと思う。

【会長】

堺ブレイザーズのプレシーズンマッチ（令和4年度）について話があったが、評価や今後の展望について名里委員からご意見いただきたい。

【名里委員】

開催にあたり、広報さかいで案内いただいたが、普段クラブとしてチケット販売をする場合と比較して圧倒的に反響が大きく、チームの認知度向上に多大な効果があった。通常の試合では30代から40代の女性に多く来場いただいているが、プレシーズンマッチでは、親子など幅広い世代の方に来場いただけた。また、令和4年度ではレシーブ体験、令和5年度では選手と

のハイタッチ会と通常のホームゲームとはひと味違った取組ができ、選手と子どものふれあいの場の提供を通じて新たなファンの増加にも繋がった。

【会長】

バレーボール男子は日本代表がオリンピック出場を決めたので、これから益々盛り上がっていただきたい。

【中曾委員】

資料 3 ページの施策 1「中学生を対象とした運動部活動の地域移行に向けたイベント」について、部活動の地域移行は大きな課題となっているが、どのようなイベントを実施したのか。

【事務局】

金岡公園陸上競技場において、オリンピックの渋井陽子氏をお招きした陸上教室を実施した。教育委員会と連携を行い、事前に各中学校の顧問にイベントをご案内した上で市内の陸上部に所属している中学生を募集し、各中学校から約 40 名参加いただいた。内容としては、走り方教室や渋井氏との意見交換等を行った。

【会長】

部活動の地域移行については、学校単位以外で大会出場できないことがネックとなっている。バレーボールは、堺ブレイザーズのユースが中学校の大会に出場している実績があるので、他の競技でも検討いただくことにより、学校単位以外の、中学・高校生のスポーツ活動が広がっていくのではないかと思います。このことについては、中学校の先生方にもご検討いただきたい。

【信貴委員】

資料 6 ページの子どものスポーツ発掘事業について、限られた予算の中で最大の効果を出すという目的で取り組まれていると思うが、量と質を考えたときにどうか。質の部分は、参加いただいた方についてはご満足いただけたと思うが、量の部分について、78 人という参加人数はどう評価しているか。

【事務局】

参加いただいた方へのアンケート調査では、すべての方から満足したとの回答を得ている。現場でもスタッフとして従事したが、参加者に喜んでいただけたと実感している。また、適性のあるスポーツ種目を提示する取組は、これまで本市ではなかった取組であり、参加できてよかったとの感想をいただいている。ただし、現状はイベント参加者に限られたものとなっているため、この取組について今後さらに周知していく必要があると認識している。一過性のイベントとするのではなく、市内で開催されている各イベント等を通じて、多くの方へこのサイト

を知っていただきたいと考えている。また、学校での体力測定結果から本ウェブサイトを活用して自宅で適性のあるスポーツがわかるという利用も想定しており、より多くの方にスポーツをするきっかけを提供していきたい。

【信貴委員】

新規事業であるため、今後の参加人数についてはぜひ頑張ってもらいたいですが、今回の目標人数はどのくらいか。子どもの運動習慣をつけることは大事なことであり、親子で参加され、子どもの運動するきっかけを探されているかと思うので、良い機会であり、興味の高い分野である。今後学校等周知を徹底することで、さらに人数が増えると思う。

【事務局】

今回は最大 120 名の参加を想定していた。10 時から 14 時まで大阪公立大学で実施し、複数種目を測定するため、スタッフの人数や時間等を勘案し目標を設定した。今後益々発展させ、スポーツイベントだけでなく学校や区民まつり等にも広めていき、どなたでも活用いただけるよう周知していく。

【会長】

この体力測定会の取組については、大阪公立大学の立場から、三宅副会長に評価と今後の方向性についてご意見いただきたい。

【三宅委員】

参加人数については、広報手段や環境設定で改善の余地があると思っている。実施場所が大阪公立大学の体育館で駅から遠かったこと、また先着順での事前募集のため興味を持った方しか来られてないように感じる。実施場所は、事前募集だけでなく、例えば、堺市役所で開催し、通行されている方に来ていただくなどの環境設定が大事である。また、サイトを活用して学校等と繋がることで拡大していくと思う。

小学校・中学校では授業の中で体力測定を行っているが、親子で参加の体力測定はない。親子で参加できるイベントは、保護者の今後の健康習慣の位置づけにもなる。今回は初めての開催であったため、反省を活かして今後、内容や実施手法を含め検討していきたいと考えている。

【藤井議員】

12 ページの現状・課題（30 代～40 代女性のほとんど運動を行っていない）について、子育て世代は、子どもの送り迎え等で毎日忙しく、運動を行っていないというより、運動ができない状況にある。通勤の際に、一駅歩く等の「ながら運動」であれば、子育て世代も行っていると考えられるため、「無関心」という表現ではなく、もっと良い表現があればと思う。

【会長】

「無関心」ではなく、「できるチャンスが少ない」ということではないか。

資料 12 ページの現状・課題では、特に子ども世代について、運動する子どもと、しない子どもの二極化についてよく指摘されている。子どもの体力の現状、コロナ禍明けの子どもの運動等について、泉委員からご意見いただきたい。

【泉委員】

学校におけるコロナ禍の影響については、どの先生も、子どもの体力は明らかに落ちていると感じている。また、数値で見ると、スポーツ庁の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果では、令和元年度と 3 年度を比較すると、特に持久力（20m シャトルラン）が落ちている。また、堺の小学生の体力については、筋力（握力）・敏捷性（反復横跳び）・持久力（シャトルラン）が全国と比べて低く、課題として残っている。

最近では熱中症のリスクから屋外での活動にも制限があり、子どもの体力低下に影響するのではと危惧している。このことから私の学校では、熱中症対策を施した上で、短時間の休憩時にはできるだけグラウンドで自由に遊ばせるようにしている。過剰に制限することで、体力が落ち、子どもが運動に親しむ機会が減り、運動から離れていくことに懸念しているところである。